

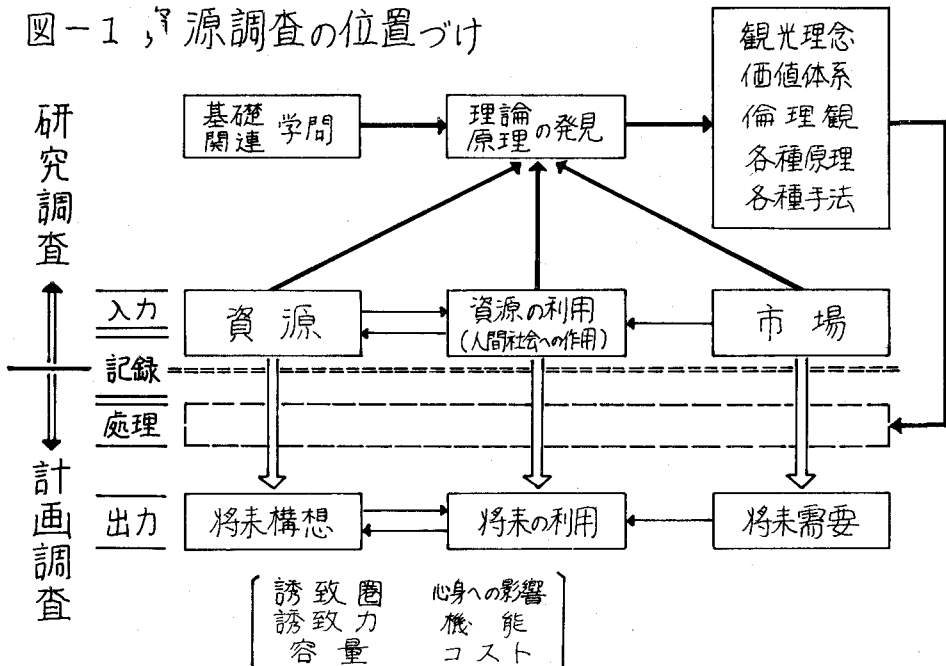
この報告は、表題の資源調査を考へてゆく方法の試論である。調査の対象となる資源には、物や現象のような可視的なものと、行政区域や所有権のような非可視的なものとがある。ここでは、前者についてのべたものである。

1. 資源と調査と調査員

資源はある対象について、あるがままの状態についてではなく、その人商にとっての効用に対応して評価されはじめて資源とよばれるものである。それゆえ、観光レクリエーション資源については、ある対象区域の将来構想をイメージし、それにより発揮される機能その他についてとりまとめを行ない、その資源性をなまけなければならぬ。それゆえ、以下そのメカニズムについて考察し、調査法への接近を求めることとする。

図-1はこの関係を示すものである。まず資源調査は構想化の過程において、図の左にあるように記録に相当するもので、入力としての対象をいかに記録して、処理しやすいようにし、出力としての構想をもってゆくのが調査の役割となる。また調査は構想化をすすめるための理論や、原理をつくるための研究調査と、開発のための調査〈資源評価のための調査〉とに分けられ、ここでは後者の調査についてのべてゆくこととする。なお構想化の過程については、才1回土木計画学シンポジウム

図-1 資源調査の位置づけ



の論文集に記載されているが、ここでの構想化は、イメージを造上げてゆく程度のもので、調査の段階で焦点のあった調査をすすめてゆくことの向題をのべたものである。このことを例をもつてのべらば、海浜計画を行なうことで海浜を調査する人は、すでにその人の海浜計画のイメージができ上がっているければ適確な調査はできないということである。すなわち、その海浜の調査中において、所定の構想(イメージ)が構成されているなければならない。それゆえ資源は、調査する計画象により調査法も異なるし、調査の結果も異なることとなる。そこで専門家としての、計画象の存在が成立することとなる。

2. 資源の変化と価値の変化

観光レクリエーション資源は自然や文化財を基調とする場合が多く、気象の変化や長い期間での考えが重要になる。風雨のように短い時分の変化、四季の変化、数百年の変化などによる資源自体の変化が存在する。

また、理論や原理の進歩により、その構想が変化することから、資源の評価も当然変化してゆくものである。過去においては産業や生活の災害としての害も、今日においては、観光レクリエーションの資源として調査され、評価されていることは、その一例である。

それゆえ、資源は空間・時間・人間の函数としてえられなければならない。各種時間のレインジを考慮し、ダイナミックに調査をしなければならないこととなる。

表-1 調査項目を引き出す表

	種 類 と 変 化	調査対象の外部の条件	調査対象の資源の条件
時 間	①自然に変えられてしまうもの ②変えなければいけないもの ③変えうるもの ④変えてはいけないもの ⑤変えられないもの	観光市場との距離 観光市場との時間距離 観光市場との経済距離	変化を与えるもの 気象 { 光線 気温 雨雪・霧 風 }
空 間	①自然に変えられてしまうもの ②変えなければいけないもの ③変えうるもの ④変えてはいけないもの ⑤変えられないもの	隣接環境条件 競合・補完の関係にある 観光資源	自然(地形・植生・動物.....) 人文(史跡・社寺・庭園.....) 観光対象施設(観覧・採集・運動.....) 無形文化財(芸能・行事.....) 観光利用施設(交通・宿泊.....)
人 間	①自然に変えられてしまうもの ②変えなければいけないもの ③変えうるもの ④変えてはいけないもの ⑤変えられないもの	市場 { 人口 所得 余暇 意識 }	住民 { 人口 所得 意識 } 過去 - 現在 観光客 { 利用の目的 利用の時刻 群衆と散衆 滞留時間 利用の密度 空間をどう体験するか }